

9月 中秋の名月



「今晚は中秋の名月だよ。一緒にお月見しよう」

後ろの席のカオルから渡されたメモには、そう書いてあった。

ユキオとカオルは同じクラスの高校2年生だ。1年生のころからずっと同じクラスだった。カオルは社交的な性格で、誰とでも友達になれた。だから、いつも仲がいいクラスメートたちに囲まれていた。

一方、ユキオは静かな性格で、一人でいることを好むタイプだ。決して人付き合いが悪いわけではなかったが、ユキオにはちょっと話しかけにくい雰囲気があった。クラスメートたちはユキオと話すとき、なぜか少し丁寧なことばを使った。

でも、カオルだけはユキオに対して、他のクラスメートと違う態度を取った。出席番号順で席順が決まり、17番のカオルの席は16番のユキオのちょうど真後ろだった。カオルは、机を少しずつ前の方に動かしてユキオに近寄り、ユキオの後ろ髪をひっぱったり、授業中でもしょっちゅうメモをよこしたりした。何かとちょっかいを出すようになったのだ。そんなカオルに対して、ユキオはたまに迷惑そうな顔をしたが、たいていはいつもの静かな態度で応えた。

2年生になる頃には、クラス全員が、ユキオとカオルは仲がいいと思うようになっていた。

お月見だと、夜に外に出かけることになるな、とユキオは考えた。ユキオの両親は食堂を経営していた。だから、うちに帰ってくるのは大体夜の11時すぎだった。ユキオが夜遅く外に出ていくことを両親は決して許さないと思うが、両親が帰ってくる前に自分の部屋に戻っていれば問題ないだろうとユキオは判断した。

「いいよ。10時ごろには家に帰っておかないといけないけど。」

ユキオは、先生が黒板に向かって板書している間に、後ろの席のカオルにメモ

を手渡した。

夜の 8 時すぎ。カオルとユキオは待ち合わせた公園から、自転車で海岸の方へと向かった。月はすでに高く上り、あたりを照らしていた。

自転車をこぎながら、カオルはユキオに言った。

「中秋の名月ってさ、けっこう雨になることも多いんだよね。でも、今日は晴れるって天気予報で言ってたから、絶対にお月見したかったんだ」

カオルはいつもよりもうれしそうな声を出した。

海岸に着いた二人は、自転車を降りて、海岸沿いの道を歩き始めた。海の上では月が黄金色の光を放ち、海上ではその光を映して、黄金色の長い道ができていた。ユキオは、その上を歩いていけば、月までたどり着けるのではないかと思った。

静かな波の音、涼しい海風。ユキオは体中でそれらを感じたくて、目を閉じた。すると、自分が、波音と海風と月光の中に溶け出して、完全に変わったような気分になった。

突然、カオルが小さな声で言った。

「月がきれいですね」

ユキオは目を開いて、カオルに返事をした。

「そうだね、本当にきれいだね」

「ふふ、ユキオ、知らないの？」

「何。今日は中秋の名月。もちろん、月が一番きれいな日でしょ。」

「違うよ。夏目漱石の有名な言葉」

カオルは戸惑うユキオに説明し始めた。

「夏目漱石って知ってるでしょ？ ほら、千円札に顔が載っている人。その夏目漱石がね、英語の” I love you ” を日本語に翻訳するときに、『愛している』じゃなくて、『月がきれいですね』って翻訳したという話があるんだよ。まあ、証拠がないから、事実じゃないってネットには書いてあるけどね」

「へえ、知らなかった。でも、なんで夏目漱石はそんな変な翻訳をしたのかなあ」

「多分、日本人は『愛している』なんて言葉、言わないと思ったからじゃない？」

カオルは笑った。ユキオも笑った。そして、こう言った。

「でも、『月がきれいですね』って言うだけで、好きだってことが相手に伝わるかなあ。変だよ」

カオルは立ち止まり、しばらく黙って海を見つめながら、答えた。

「そうかもね。でも、こんな満月の下を、好きな人と一緒に散歩して、相手に月がきれいだねって言えば、自分は今すごく幸せだってことぐらいは伝わるんじゃないかな」

ユキオはくすつと笑って、こう言った。

「カオルって、意外とロマンチストなんだね。知らなかった」

ユキオはさらに続ける。

「ねえねえ、『月がきれいですね』って言われた場合、どんな答えが正しいの？」

『わたしもあなたのことが好き』っていうのはちょっと変だよね」

カオルはほほえみながら、答えた。

「ああ、いくつかパターンがあるらしいよ。まず、『今なら月に手が届くでしょう』っていう答え。あなたの好きだという気持ちは私に届きましたよ、って意味になるらしい。次に、『あなたと一緒に見るから、月がこんなにきれいなんでしょう』っていう答え。これは説明しなくてもわかるよね」

「へえ、おもしろい。じゃあさ、好きじゃないってことを伝えたいときはどう答えるの」

「それはね、『私には月が見えません』とか、『月に手が届かないから、きれいに見えるんですよ』とかあるらしいよ」

「わあ、そんなこと言われたら、ショックだね」

二人は声を上げて笑った。

ユキオが家に帰ったのは 10 時すぎだった。ベッドにもぐりこんだユキオは、カオルのことをずっと考えていた。

ユキオは小さいころから一人でいることが多かったから、一人でいることが寂しいと思ったことはなかった。高校に入って、新しいクラスメートのカオルが後ろの席から、ずっとちょっかいを出してくることに、最初はちょっと面倒くさいなとか、困ったなとか、そういう気持ちになったものだ。でも、いつしか、そんなカオルのちょっかいを待っている自分に気がついた。カオルが話しかけて

こない日は、なぜかさみしくなった。そして、カオルの姿をいつも目で追うようになった。カオルはいつもクラスメートたちに囲まれていたが、ときどき、クラスメートたちから離れて、一人で窓際の席に座り、遠くをぼんやり見つめていることがあった。風になびくカーテンの隙間から見え隠れしているカオルの横顔を見つめていると、ユキオはなぜか胸が苦しくなった。自分の中の特別な感情にユキオが気づいたのは、高校1年生の夏休みが始まるころだった。

ユキオは思った。明日、カオルにメモを渡そう。メモにはこう書こう。

「昨日のお月見、楽しかったよ」

それから、「月はずっときれいだったよ」

同じころ、カオルもベッドの中で、ユキオのことを考えていた。高校に入ってからすぐ、ユキオのことが気になった。いつも一人で静かに本を読んでいるユキオの周りには、ちょっと声をかけにくい雰囲気があった。そんなユキオの雰囲気をカオルはなぜか壊したくてたまらなくなった。だから、後ろの席から髪をひっぱった。黒くてまっすぐで、さらさらしたきれいな髪だった。ぱっと後ろを振り向いたユキオはまっすぐとカオルを見つめ、眉をひそめて、また前を向いた。カオルは面白くなって、何度もそれを繰り返した。自分の中の特別な感情にカオルが気づいたのは、高校1年生の夏休みが始まる頃だった。

カオルは思った。今晚、ユキオに私の気持ちは伝わただろうか。やっぱり、明日ちゃんとメモを渡そう。メモに書く言葉はこれだ。

「昨日の月はきれいでしたね」

それから、「君が好きです」

(2859 字)

(2022.8 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.